わたしだけのひみつ

わたしは、なつやすみ、えいごのあそびのかえり、チトセピアのまえからバスにのりました。バスのなかは人がいっぱいで、立っている人もいましたが、わたしはあいているせきを見つけてすわることができました。まえから二ばんめの一人がけのせきです。

するとつぎのバスていから、お母さんと子どもがのってきました。人がいっぱいで、せきもあいていなかったので、そのお母さんと子どもはべつべつのところに立ちました。子どもがわたしのよこに立ちました。子どもは、わたしより小さいようちえんせいぐらいです。

「せきをゆずろうかなあ。どうしようかなあ。」とまよいました。まよっていると、こころのなかに二人のわたしができました。ひとりは「あくま」で、もうひとりは「ゆうき」です。ゆうきが、「せきをゆずりなさい。」といいました。するとあくまが「はずかしいからいうのはやめろ。」といいました。わたしのこころのなかで、なんかいもあくまとゆうきがけんかしています。

わたしがなやんでいるとゆうきが、「立つのはきついけど、やさしいこころをもつほうがいい。」といいました。あくまはきえました。わたしは、はずかしかったけどおもいきっていいました。「どうぞ」。そしたら、子どもがにこっとして「ありがとう」といいました。せきをかわってあげたので、お母さんも「にこっ」としていました。わたしは、とてもきもちよくなり、おねえさんになったようでした。

だんちで、わたしはバスをおりました。おりたあと、一人になると、なにかたのしいきぶんになりました。なにかうたいたくなりました。

いえまであるいてかえり、げんかんをあけてお母さんに「ただいま」といいました。お母さんは「おかえり」といいました。お母さんに、バスのなかのことをはなしませんでした。おねえちゃんにもおとうさんにも、だれにもはなしませんでした。わたしだけのひみつです。

えいごのどうぐをじぶんのへやになおしているときおもいました。「こんどは、もっとはやくゆずろう。」

これが、わたしの「なつやすみのゆうき」です。

平成八年度『全国児童才能開発コンテスト』入賞作品